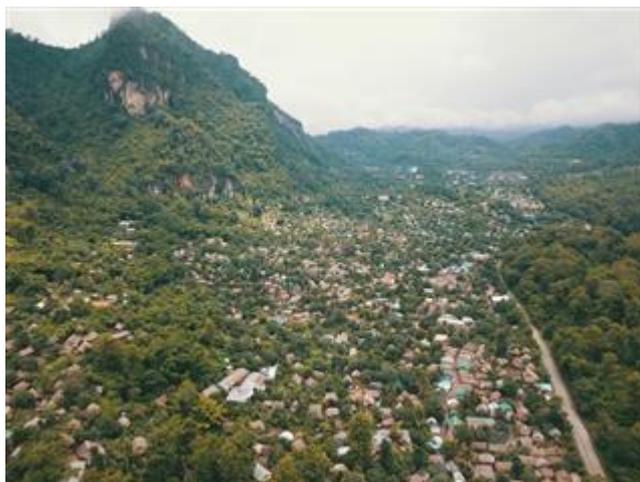


「^{ひんこん}貧困からの^{だっきやく}脱却」4

^{ぼく}僕の^{ゆめ}夢は^{へいし}兵士になることだった ^{にほん}一日本で^{まな}学ぶ^{なんみん}難民 ^{ベン トウ}ベン トウ

カレン族という少数民族のベン トウは、タイの難民キャンプで生まれ育ち、16年間暮らしてきました。祖国ミャンマーでは民族の争いが続いていて、ミャンマー軍に追われ、住むことができません。



タイの^{なんみん}メラ難民キャンプ

みなさんは自由についてどのように考えていますか。次の休みには旅行へ行こうかな、将来はどんな仕事をしようかな、など色々な選択があると思います。しかし、難民キャンプではそうはいきません。難民キャンプの中には学校もあり、放課後には友人とサッカーやバレーボールをして、楽しく過ごせます。しかし、自由がなく、勉強しても学んだことを活かすことはできません。学校を卒業したとしても働く場所はほとんどないのです。また、国籍がなく海外へ行くどころか、国内の他の地域へすら行けないのです。ある日、キャンプを出ようとしてタイの警察につかまってしまいました。「生きていく意味がない」と思いました。でもひとつだけベン トウには夢がありました。それは、自分の民族の兵士になることでした。

そんなベン トウは16歳のときに難民として家族で日本にやってきました。「第三国定住制度」という制度で来日した初めての家族だったので、空港に着いたときからカメラに写真を撮られ、メディアに注目されました。「難民」として受けられる支援は最初の6カ月のみ、そこから後は自分たちの力で生きなければなりません。夜に勉強する夜間中学と定時制高校に通いながら、日本語を勉強し、アルバイトをして家族を支えました。また、少数民族には知識人がいないことに気づきました。だから平和を求めながらもその解決策として「争う」ことにしか考えられないんだと思いました。

大学に入って学びたいと思いましたが、でも塾に行くお金もありません。一年目は受験に失敗し、無料

塾や、支援してくれる方をお願いして、勉強を教わりました。受験が心配で、胃が痛くなり、病気になる入院もしましたが、ここで「自分は難民だからうまくいかない」と考え諦めてしまったら、難民キャンプのみんなに希望を与えられないと思って勉強し続けました。

定時制高校では日本人の友人もできました。でも自分が「難民」であることを言うことはできていませんでした。大学に合格が決まり、久しぶりに友人と会い居酒屋にいきました。そして自分は「難民」であることを伝えました。友人は言ってくれてありがとうと言い、だからといって、ベントウに対する態度は何も変わりませんでした。ベントウはとても嬉しい気持ちになりました。

大学に入ってから、「難民」であることを周りに伝え、自分が「難民」とは何かを伝えていこうと思うようになりました。でも「“難民”としてカテゴリ化してほしくない。“難民”になりたくてなったわけじゃない。」とも思っています。また、自分の民族である「カレン族のために何かしたい」と思っていた気持ちも少し変化してきました。アイデンティティにこだわりすぎると「自分たちと自分たちじゃない人々という区別ができてしまう」と考えるようになりました。「あの人はあの国の出身だから、難民だから」といったことからその人を判断するのではなく、その人自身がどうかということを見るべきだと思えるようになりました。ベントウの夢はもう兵士になることではありません、さらに学び続けることです。



このやちょうせん
お好み焼きに挑戦！

(1351字)

(2020.12 Written by Yukiko OKUNO)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスのもと提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典: 「たどくのひろば」 (<http://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.